

研究

中島子玉著「日本詠史新樂府」(四)

解説・切り絵 佐藤 巧

編集・校正 鶴野博文

(十) 相公怒 (相公怒る。壇ノ浦屈辱の敗将宗盛、平家の望みを絶つ)



(楽府詩)

(読み下し文)

生女相公怒

女を生めば相公怒り

生男相公喜

男を生めば相公喜ぶ

莫怪他年虎類狗

怪しむ莫れ他年虎、狗に類し

螺贏負得螟蛉子

螺贏からめいれいは螟蛉めいれいの子を得て負うを。

叡壑東風飄白旄

叡壑えいごうに東風ひるかぜ白旄はくまうを飄ひるがえし、

龍袞舞入西海濤

龍袞りゆうこんは舞まいて西海なみの濤なみに入る。

国亡不敢以身殉

国亡くになぶも敢あえて身みを以もて殉くぜず、

我載我頭来自獻

我わがが頭あたまを載おせ来きたりて自おら献けんず。

猶解引衣掩眠兒

猶なほ解とき引ひく衣いもて眠おる兒こを掩おお。

俎肉加刀知不知

俎肉そじくに刀やを加くうるも知しるや知らずや。

(語釈)

・虎狗に類す 下手な絵描きが猛虎を描こうとして、

いつか犬に似てしまふ譬え(中国・馬援伝)

・螺贏 じがばち (似我蜂) ・螟蛉 青虫

(ジガバチが青虫を負い、似我(我に似よ) 似我と言ひ

聞かせ、わが子に育てんとする例え) (詩経)

この二つの諺を子玉が引用したのは、頼山陽の「日本外

史」に「初めて壇ノ浦の敗に、時子衆に謂いて曰く、宗盛

は故相国の子に非ず。吾の再妊するや、相国其男を生むを

期す。而して女生まる。吾れ相国の恨怒を恐れ、密かに人

をして之を一傘工の男児に易へしむ。宜なるかな、其重盛

に若かずして、以て此に至る。」という記述に基づいて、楽

府を創作しており、彼の作品の殆どは「日本外史」の原文から取材している。

・相国 太政大臣の唐名、清盛の事

・叡壑 えいかく 比叡山麓、延暦寺（後白河法皇は源平の抗争に巻き込まれぬよう密かにここに潜んでいた）

・龍衰 りゆうそい 龍を刺繍した天子の礼服（安徳帝をさす）

・俎肉 そにく まないたの上の肉

### （通釈）

清盛は妻時子懐妊の際、男児誕生を熱望していたのに反し女兒が生まれたので、夫の機嫌を損じぬため極秘裏に赤子の交換が行われた。

しかし、問題は名門一族を率い、国政を指導できる資質を受け継いでいないことである。

才能の無い絵描きが虎を描こうとして犬に似たものができたり、ジガバチが青虫をハチに育てようとしても駄目なことは怪しむほどのことではない。

一一八三年（寿永二年）源氏の挙兵から三年目、惟盛らを官軍の指揮官とする平家の木曾義仲征討軍十万は、かの俱利伽羅峠（火牛の計）などの惨敗を重ねて京に逃げ戻

ってくる。

義仲がこれを追撃、東風に源氏の白旗を翻しながら叡山にせまる勢いに圧倒され、宗盛は一族を挙げて都落ちをせざるを得なくなり、白河法皇奉戴にも失敗する。

綺羅の龍衰で正装した安徳幼帝は、これらの結果、西海の波間に二位の尼とともに神器の宝剣を抱いて沈んで行く。

宗盛・清宗父子は、他の武将たちがこの大決戦に華々しく戦い、潔く散っていったのに反して、凡情にひかれて生き残り囚われの身となっても、自分の衣を脱いで眠る子に掛けようとする哀れさである。

頼朝、彼らを引見、俎上の肉に小刀を載せて、潔く自決すべしの意を暗示したが、その心を悟ったかどうか。

### （子玉漢文注釈文の読み下し）

清盛夫人二位の尼、嘗て語りて曰く「余、嫡子重盛を生みし後、又、身めるあり。故相国、其れ男子を期す。而して女生まる。余、相国の怒りを畏る。」

会、清水の側に僧の傘を売る者ありて同時に男を生み、之と相換えしは宗盛是なり。」

戦死、入水している。

「虎を画かんとして成らず却つて狗に類す」馬援の語にして、「螟蛉、子有らば蜾蠃之を負う」は詩(経)に出づ。義仲、師(軍隊)を師いて南上、叡壑に次る(陣す)。宗盛その族を率い、安徳帝を劫(奪)して西奔、源義経と壇ノ浦に大いに戦うも平軍敗績し二位の尼安徳帝を抱きて蹈海(入水)して殂(死)し、諸盛皆死す。

独り宗盛及び其の子清宗自ら決する能わず、天を仰いで立ちしに或るひと宗盛を擠して水に墜し、清宗之に従がう。然るに身軽くして沈まず、相顧みて遊ぶ。

義盛、これを鈎し、併せて虜にす。

宗盛父子義経の六条堀川第に囚われ、夜眠るに衾(夜着)無く宗盛、浄衣の袖を以て清宗を掩うを視て、守る者、涙下る者あり。

頼朝、宗盛父子を召見、俎肉に刀を加え、以て自決の意を示す。然るに遂にその意を解せずと云う。

(通釈)

文治元年(一一八五)三月、源平最後の決戦場では勇将知盛の兄弟、いとこ等みな果敢に戦い、女性ながらも二位の尼(時子)、継いで太后(徳子)、安徳幼帝とともに潔く

これに反し、宗盛、その子清宗は自決できずに天を仰いで呆然と船上に立っていた。見かねた従士の一人が宗盛を水に押し墜とし、清宗もこれに従がったが、身が軽くて沈まず、顔を見合わせながら泳いでいた。

義経第一の家来、伊勢三郎義盛がこれに鈎を引つ掛け二人併わせて虜にし、京都の義経邸に収監したが、夜になつて夜着が無く、宗盛が浄衣(白むく)の袖で清宗を掩うのを見て、看守の中には涙を流す者も居たと云う。

しかし、中島子玉はこれを親子の情愛の深さとは見ず、謂うなれば「大義親を滅す」などに反する、一門の棟梁らしからぬ凡情とみて、終始宗盛批判で通している。

因みに頼山陽の「日本外史」の原文に、宗盛、鎌倉に護送され、頼朝がこれを召見する際のこととして、

『：自ら簾内に座して、宗盛を前舎に延き、比企能員をして之に言わしめて曰く、「頼朝敢えて私仇を復するに非ず。乃ち王命(白河法皇)を成すのみ。今日の臨、何ぞ幸甚なる」と。宗盛懾伏(恐れ入つて伏し拝む)して死を宥されんことを請う。許さず。諷して自殺せしめんとすれど

も解せず』とある。後、近江篠原で斬首され京に晒された。

(註) 比企能員ヒキノサトキ頼朝流人時代を援助した、比企の尼の子で重要な側近

(編集メモ)

宗盛の取替え子説は現在の史実には取り上げられてはいない。また、重盛の生母は時子ではなく、右近将監、高階基章女たかしなもとあきのむすめ、となっていて、史実に一致しない。

いわゆる正史ではなく、外史では、かなり文学性に重きをおいて自由な記述が散見される。

【参考】

- ・ 日本古典文学(19)巻角川書店
- ・ 日本歴史シリーズ5 世界文化社

(十一) 執兄盥カクケイアン(兄の盥を執るカク＝頼朝諸弟の才を試す)



(楽府詩)

(読み下し文)

執兄盥

兄の盥かんを執とる

湯沸手爛吾不辭

湯沸き手爛るも吾辭せず

他年四海湧狂瀾

他年四海狂瀾に湧き

亦能隻手為公支

亦能く隻手公の支えを為す

忍吾久執盥中熱

忍ぶこと吾久しく盥中の熱を執る

奈兄急燃釜底其

奈ぞ兄急ぎて釜底の其まめを燃やさん

(通釈)

- ・ 盥 たらい状の金属製(銅など)の器
- ・ 隻手 片手、ここでは一人で、の意

・苺まめがら

頼朝を指し、釜の中の豆は義経。元は同じ一本の木（兄弟）なのに兄が弟をいじめること。中国曹操の子、兄の丕と弟の植の仲違いの故事から

（通釈）

頼朝、西征の大將を選ぶのに、金盥に熱湯を入れて弟たちに持たせた。義経以外は、すぐに手を放したが、義経は手が爛れるような盥を執り続けた。

後に国中が激しい動乱の中で、義経がどれほど頼朝の支えになったか。それなのに、どうして兄はそんなに義経の追放を急ぐのか。

（子玉の漢文注釈文の読み下し）

頼朝、諸弟の才を試みんと欲し、陰かに火を以て盥器を烙り、諸弟をして更侍して執らずに、輒驚きて釈つ。

独り義経のみ盥を終わりまでせず、神色自若たり。

頼朝、是を以て、其の事に堪ゆるを知りて心陰かに之を忌み、後、遂に讐敵となす。

曹子建（植）の詩に云う、「豆を煮るに豆萁を以てす。豆、釜中に在りて泣く」と。

（通釈）

義経は他の兄弟達と違い、熱盥を最後まで放さず持ち続け、落ちて着いて顔色ひとつ変えなかった。

兄の頼朝、義経の艱難に耐える力の抜群なことを知って、ひそかに是を憎み、遂には仇敵視するまでになる。

中国でも「三国志」で有名な、後漢を廃し、魏朝を創めた曹操の子の、兄の丕と弟の植との間に確執があり、親子兄弟ともに優れた名文家だったが、鎌倉政権と同じく、悲劇的に短命に終わっている。

子玉がこの楽府題を取り上げた心を斟酌し、短絡的に補足すると、頼朝には肉親に対して報恩や感謝の気持ちは無く度を越して酷薄である。

例えば先ず第一に、平家に都落ちさせたのは頼朝のいとこに当る木曾義仲で、同族の争いを避け長男の義高（十一才）を頼朝の人質とし娘の大姫（六才）と婚約させてあったのに、義仲とともに遂には殺してしまふ。

第二に弟の義経のひよどり越えや、後で義経を讒訴する者達の反感を一身に受けて決行した屋島攻め（逆櫓）など、彼の命がけの機略と決断力、行動力が無ければ源平戦の決着はこんなに早くなかったかもしれない。

これらについて、子玉の楽府と同時代の「日本詠史集」から関連の漢詩、七言絶句の中、特に子玉に近い人の詠史（読み下し文）を紹介する。

源廷尉（義経）

頼山陽（子玉の師）

宝刀海に跨り鯨鮓を斬る。貝錦郷に帰りて忽ち斐斐。  
阿兄は識らず肥家の策。枉げて同根を煮て牝雛を養う。

（大意）

源氏の宝刀を以て鯨のような平家の大軍を破る。

大功の錦は帰郷して、讒言で織られた綾織物に変わって  
いた。兄頼朝は源家を肥やす策を知らず雌鳥（妻政子の  
家＝北条氏）家を強大にしてみましたのだ。

源右府

秋月橋門（佐伯藩士）

橋門、名は龍、字は伯起、豊後佐伯の人、東京に住す宜園  
（咸宜園）の杜中なり。

棘を抜き茅を誅し茨を掃ふ。園を理して方待つ落成の  
時。誰か図らん卻て場師に誤らるるを。折り尽くす階前  
党棣の枝

（大意）

棘や茅などを取り除き、庭園を整理し、落成を待って  
たところ、思いがけず場師（植木屋）に間違えられて党棣  
（にわざくら）の枝を全部切られてしまった。

これは頼朝が色々な傷害を克服して源家の基礎が成立  
せんとする時、讒言や北条氏の術策により、藩屏である兄  
弟を猜疑し殺し尽くしたことを諷したものである。

（以上 戸高厚司氏所有の「日本詠史集」より抜粋）

（十二）殺吾使（吾が使を殺す）・義経、頼朝の刺客を

殺し、全国に追捕される。）



(楽府詩)

(読み下し文)

殺吾使 吾有辞  
 六十六州搜蹤跡  
 神龍無術可繼羈  
 神龍寧顧蝮蛇群  
 飛騰直入韃靼雲  
 西海搏鼻爪未折  
 攫去清和一脈血

吾が使を殺さば吾に辞あり  
 六十六州蹤跡を搜す  
 神龍羈を繼ぐ可き術無し  
 神龍寧ぞ蝮蛇の群れを顧らんや  
 飛騰して直ちに入る韃靼の雲  
 西海に鼻を搏ちし爪未だ折れず  
 攫去す清和一脈の血

(語釈)

- ・ 殺吾使 頼朝が義経に送った刺客、僧昌俊が逆に義経に殺されたこと。
- ・ 辞 責めたり、訴えたりする言葉、口実。
- ・ 神龍 義経を敬称して言っている。
- ・ 蝮蛇 やもりやゲジゲジなど、源氏の讒言者たち。
- ・ 鼻 凶暴な習性から平家の強敵をさす。
- ・ 韃靼 ここでは蒙古をさす。
- ・ 清和一脈の血 清和天皇に発する源氏の血統

(通釈)

もと興福寺(藤原氏の氏寺)の堂衆(下級僧)だった土佐坊昌俊は平家によって寺が焼かれた際、源氏に奔つて、頼朝の弟、範頼の配下に組み込まれていた。  
 「義経記」などによると、なにしろ、將軍の弟の刺客は皆避けたがり、昌俊に成功報酬には安房と上総をあたえらるゝと書かれているほどだから、決して只の使者ではないが、逆に昌俊が失敗して殺された。

頼朝、これこそ思う壺と、白河法皇が義経にあたえていた頼朝追討の院宣も楯に全国総追捕使を克ち取る。  
 神龍(義経)もついに羈(王家=源氏)の血統を継ぐ可き術なく、かくなる上は、何で忌まわしい虫けらの如き一族と讒言者たちに未練あらんやと、一気に蒙古に渡り、未だに衰えてない、西海で強敵を討った武力と清和源氏の血統を大陸に攫つていったのである。

(漢文注釈文の読み下し)

頼朝、僧昌俊をして義経の堀川第を襲わしむ。義経、捕らえて之を斬る。

頼朝、これを聞き大いに喜びて曰く「吾が使を殺したる

や、今より後の兵には辞（口実・言い分）有りとし

乃ち、六十六州（全国）総追捕使を奏請し、以て義経を捜さしむ。

義経、奥（奥州）に奔り其刺使（地方長官）藤原秀衡に依るも、秀衡死して其子泰衡等義経を殺す。

或る人伝う。義経満州に入り、其子孫尚盛なり。寛永癸未の年（一六四三）、越前新保の人漂流し、韃靼の地に至り奴兒（賤民）の門戸に義経の像を神に画けるを觀る、と。

頼朝、清和源氏を再び伝うるも、実朝に至りて絶ゆ。其を紘く者は独り義経の子孫有る耳。

#### （通釈）

この樂府詩と注釈文のキーワードは、なんと云っても「吾に辞あり」である。

「辞」はここでは、ことば、の意であるが相手を責める意のある言葉をさしているのである。

ここでは俗に「ひとの使いを殺せばこちらにも文句があるぞ。」と言って、いいがかりをつける、というやりかただが、法皇の院宣濫発癖が祟って、義経にも頼朝追討令を出していたので、義経の西国での再挙計画が台風で失

敗すると、法皇側は大混乱になり、頼朝に隙をつかれ、前の院宣の墨も乾かぬ間に、義経の追討令のみならず、全国総追捕使、守護・地頭の設置およびそれ等の運営管理の費用として全国一反当り五升の米の徴収等を認可せざるを得なくなつたのである。

頼朝が、昌俊が殺されたと聞いて大いに喜び、「吾に辞あり」と言つた内容は、このように莫大で、鎌倉政權を大飛躍させたものだった。

義経の大陸移住説は現代のいわゆるアイドルのファン心理から生じたものとみなされている。

